The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	堂友會記事
Author(s)	酒井, 全太郎
Citation	懐徳. 1941, 19, p. 49-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

定日講義　十一月より三月まで午後六時半より八時半まで、四月より十月まで午後七時より九時まで。

講　演　十一月より三月まで午後六時半より八時まで、四月より十月まで午後七時より八時半まで。

▲現行講義、講演科目　**定日講義**　月曜、靖獻遺言、小學纂註、火曜、支那語、大學音讀、水曜、韓非子、木曜、萬葉集、十八史略、金曜、孟子、支那語、**土曜講演**　東亞共榮圈の諸問題、本草、**通俗講演**　經濟上より見たる近代支那

堂友會記事

幹事　酒井全太郎

▲昭和十五年十月十二日

懷德堂恒祭に會員一同奉仕す。

▲十月二十日

東寺の見學を催す。指導者源豊宗先生の臨地講演を拜聽後佛像を見學す。尙京大花山天文臺見學豫定のところ雨天のため中止。參加者は吉田鋭雄先生を初め四十名であつた。

▲十一月十六日

大講堂に於て紀元二千六百年奉祝式を擧行せらる。理事長小倉正恒先生、顧問狩野直喜先

生の講話を拜聽す、終つて參列會員一同招かれて祝宴に列し、乾杯して　聖壽の萬歳を祈る。

▲十二月十九日

小講堂にて季末茶話會を開く。三十餘名出席阪倉、吉田兩先生より御話を承る。

▲昭和十六年一月一日

會員數名參集し、先師儒諸先生の神位を禮拜す。

▲三月二十三日

凡そ四十名參加し、洛西大覺寺に於て源豊宗先生の臨地講演を拜聽し、襖畫、庭園等を參觀したる後、徒步にて大澤池、廣澤池の畔を過ぎ北野に至り、北野神社にて出征將士の武運長久を祈願し、本殿蛙股の模樣や繪馬堂を參觀す。

▲三月二十七日

阪倉、大江、吉田三先生臨席、季末茶話會を開く。最近戰地より歸還せられたる吉田武別所一雄兩君を中心に、大陸の風俗に就て談話あり、出席者約三十名であつた。

▲四月七日

理事長小倉正恒先生今回國務大臣を拜命せられ、是の日大阪驛發上京せらる。

▲四月二十日

凡そ三十名參加し、南海線淡輪より春霞の淡路島へ渡り、洲本より岩屋に至る西海岸の風光を賞しつゝ、澤瀉久孝先生の指導にて萬葉遺蹟を探勝し、明石へ渡りて歸阪す。

▲五月十日

昨秋擧行した皇紀二千六百年奉祝式當日に於ける小倉理事長の挨拶並に狩野博士の所感と題する講話を登載して懷德臨時號として發行す。

▲五月十一日

天王寺に於て推古時代の伽藍配置に就て源豐宗先生の臨地講演を拜聽して後、堺南宗寺に至り、茶室堂宇等の建築や開山上人及び利久の像など拜觀し、更に祥雲寺の釋迦如來像や庭園、養壽寺の襖繪などを見學す、參加者三十數名。

▲五月十八日

天沼俊一先生指導下に大德寺及び妙心寺の伽藍見學、了つて北野神社に參拜、八棟造に就て臨地講演を拜聽す。參加者五十名。

▲六月十五日

近江神宮、藤樹神社に參拜、澤瀉久孝先生の指導にて堅田、大溝方面の萬葉遺蹟を探勝す。參加する者三十餘名であつた。

▲六月二十五日

吉田先生を初め會員數名、上本町誓願寺の中井家墓所へ參詣し、墓石の拓本や、寫眞を撮り、更に筋向ひの實相寺に至り、五井蘭州先生の墓へ參詣す。

▲六月二十六日

季末茶話會を開く。阪倉、吉田、張三先生臨席、三十餘名出席して、支那の教育や日本の言葉支那の言葉などに就て談ず。

▲七月七日

降りしきる雨の中を午前十一時、此の度國務

大臣となられた理事長小倉正恒先生を本堂玄關前にお迎へする。先生は二階會議室にて少憩の後、講堂に入りて正面の椅子に着席される。吉田先生の歡迎の挨拶ありて後、先生は慈顏に笑みを浮ばせながら、人間の一番大切なことは道德である。卽ち懷德堂の宗旨である德性の涵養といふ事である。故に經濟と云つても道德が基になる、二宮尊德翁は道德の實踐が經濟であると申した。懷德堂の考も同樣なことになる。中庸を得て實際と離れぬのが懷德堂の學問の特長である、竹山先生の草茅危言などを見ても、空理空文は一つもない、實際の學問である。大阪はすべて實踐窮行を尊び、空理空論は尊ばない土地柄である。私は中庸といふものが儒敎の眞髓であると心得て居る。何でもよく咀嚼玩味して、常識を以て判斷するのが中庸の道である。また今日は「勘」といふ數理を超越した働きが拔けて居る。是非の判斷に「勘」といふものがある。それが尊い、尤も空漠な「勘」ではいかぬ、實際を踏んで來た「勘」でないといかぬ、要するに、物の兩端を叩いて其の中を執り、自分の良心なり常識を發達させて、之を日常生活の上に實行せんことを望む。との旨を約二十分に渉つて諄々訓話あり、同十一時四十五分退出せらる。當夜先生の歸京に際し、會員代表が見送りした。

▲七月十七日

十數名參加し嚴島に至る。旅館岩惣に宿泊し、翌十八日早朝より天沼俊一先生の指導に

て嚴島神社の國寶建築すべてに就て見學す。歸途、尾之道市に下車して宿泊、十九日早朝より淨土寺及び西國寺の國寶建築を見學す。參加者は何れも復と獲難き好機會に惠まれたるを喜びつゝ歸阪した。

▲九月六日

十七名參加し、高野山に抵る。總持院に宿泊し、杉間より漏るゝ滿月に詩囊を肥し、翌日、天沼俊一先生の指導にて不動堂、經藏、藥師堂、位牌堂、多寶塔など國寶建築全部を見學す。

編輯を終へて

幹事　山本楢信

頑迷な抗日に已むなく破魔の劍を拔き放ちてより茲に四年有餘、皇威は滿蘇國境より佛印の南端に及び、武力に於て絕對壓倒的地位にある我が國は、思想戰、經濟戰に於ても亦一層努力して此の聖戰の目的を貫徹しなければならぬ。而して今や昨秋勃發せる歐洲戰爭の影響にて、太平洋の風波は愈々荒れ狂ふて居る。此の時に當りて、平素より主張せらるゝ道義の信念を以て屹然として立ち、五十年に垂んとする實生活を基礎とし、經濟戰に於て其の必勝を期して挺身奉公の誠を盡してゐられる。我が懷德堂理事長小倉正恒先生が、藏相としての其の勇壯な姿